Newsletter

2015 | 春 | 特定非営利活動法人ジェン Vol.60

JEN Japan Emergency NGO

子どもたちのパワーが希望になる。

子どもたちは、大きな力を秘めている。
コミュニティへの影響力、伝達力、
そして、夢見る力。
前向きな力は、人びとを笑顔にする。
人びとの希望になる。
彼らを支えることは、未来を支えること。
そんな力を、
これまでも、これからも
JENは支えていきます。

特定非営利活動法人 JEN Newsletter Vol. 60 2015年04月20日発行

子どもたちに公園でどんなイベントがしたい?
というアンケートを実施する今藤さん(右手前)

5日間で300人を超える子どもが集まった
8月のラジオ体操

事務局長木山啓子とJENスタッフの

往復書簡

啓子さんへ

昨年春、私たちは、子どもたちを取り巻く環境について
啓子さんと様々な話合いをしましたね。
仮設住宅に場所を奪われた公園。
津波によって錆びついたままの遊具。
子どもたちが外で遊べなくなって
大人たちは見守る事ができなくなりました。

そんな状況を変えるためにJENは公園整備を通じた
子ども会再生プロジェクトを始めました。
地域の住民と話合いを重ね、
公園のデザインやルールを決めてもらいました。
8月に公園整備予定地で震災後初めて行われた
ラジオ体操には5日間で313名もの住民が参加し
12月には、みんなで遊具にペンキで色をつけ
ベンチを組み立てて公園整備の仕上げをしました。

2つの公園が住民の手により完成した今、
子どもたちは元気に遊び
その姿を見守る大人たちにも笑顔が戻りました。

今、石巻では、仮設住宅から復興住宅へと
転出する人が増えています。
復興に向けて様々な変化が起こり
日々新たな課題が生まれています。私たちはこれからも
取り残されがちな人や地域に寄り添って
1日も早い心の復興を目指しサポートを続けていきます。

今藤 正太郎

今藤さんへ

震災から丸4年、未曽有の災害からの復興ですから
日々新しい課題がもち上がっても
不思議ではありませんね。
昨年、皆で話し合った子どもたちへの支援活動が
軌道にのったとのこと、とても嬉しいです。

子ども達が元気よく遊ぶ姿に、大人は励まされますよね。
世界中で復興に尽力する大人の原動力の何割かは
子どもたちの笑顔かもしれません。
そして、地域で子どもを育てていく、という共通の目的は
世代を超えたコミュニケーションを生んで、
地域全体が活気を取り戻すきっかけになります。

人は、人と話す事で悲しみや辛い記憶を乗り越え
前を見る事ができるようになるのですね。

復興住宅へと住居が移り変わっていく中で
新しいコミュニティ形成がこれからの大きな課題ですね。
JENスタッフの「支える力」で、石巻のみなさんが
もっともっと笑顔になることを期待しています。
その笑顔に会いに、またそちらに伺いますね。

木山 啓子

皆さまからのご寄付は、寄付金控除の対象です。
最大で約40%が所得税の税額控除となります。

※控除額は寄付金額や年間所得額によって異なります。詳しくはホームページをご覧ください。

生きるちから マンスリーサポーター
あなたの毎月の支援で、世界の人びとの、生きる力をサポートします。

郵便局から
00170-2-538657
口座名 **JEN**

遺贈寄付
ご自身の財産や大切な方の遺産を、JENが支援する世界中の人たちへ、確実にお届けします。

インターネットから
クレジットカードでご寄付いただけます。
(VISA、MASTER、JCB、AMEX)

本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載は固くお断りいたします。

JEN Japan Emergency NGO

特定非営利活動法人ジェン(JEN)
東京本部事務局

〒162-0824 東京都新宿区揚場町2-16 第二東文堂ビル7F
TEL : 03-5225-9352 FAX : 03-5225-9357
E-mail : info@jen-npo.org
ホームページ
http://www.jen-npo.org
NPO JEN 検索

子どもたちの持つパワーを平和へつなげる

教育などの継続的な支援がもたらす効果

～アフガニスタン14年の活動～

アフガニスタンは、1970年代から現在に到るまで、干ばつ、内戦、地震、洪水、武装勢力による攻撃、テロとの戦いなど、様々な問題に直面しています。こういった環境の中、高齢者や女性、そして子どもは、いつも厳しい状況を強いられます。けれども、子どもたちは、コミュニティへの影響力や、伝達力といった大きなパワーをもっています。JENは、そんな子どもたちのパワーを活かし、また、子どもたちに励まされながら、14年に渡り、パルワン県で教育支援や、衛生環境改善の支援を行ってきました。

就学率を上げるために

アフガニスタンは、紛争等の影響により就学率が低く、中等学校の就学率は全体で33%に留まります。特に女子の就学率は23%と世界的に見ても大変低い状況です。※これには、様々な要因があります。

要因の一つは、十分な教育環境が整っていない事です。親たちからは「壊れかけの教室や施設の安全面が心配で子どもを通わせるのが不安だ」「子どもたちからは「衛生的なトイレがないので学校に行きたくない」といった声が聞こえてきます。

そこでJENは、2002年よりパルワン県全域で、学校の再建や修復、トイレや手洗い場などの衛生環境整備事業を行ってきました。事業を行う際は、学校の校長先生やコミュニティリーダーを中心とするコミュニティに、何故JENが活動を行うのかを理解してもらい、信頼関係を築きながら進めます。時には、周辺地域で反政府軍と政府軍の衝突などが起こる事もあります。そんな中でも、彼らとの強い連帯関係があるからこそ、事業を無事に進められるのです。支援を必要としている人々が将来に希望を持てるよう、コミュニティの全員が一体となって活動するのをJENチームが協力・サポートしています。

もう一つの要因として、女子教育に対する文化的背景があります。例えば、自分の娘が男子と同じクラスに通うことを親が拒む、家族から若年での結婚を促されるといったことや、時には女子が心ない暴力の対象となってしまうという安全面でのリスクもあります。また、女性教師の不足も、女子教育を阻む要因となっています。そこでJENは女子校の再建・修復の際には、外周壁を建て、生徒たちの安全な環境とプライバシーを確保する事を優先しました。これによって、女子生徒の入学率の上昇を狙っています。女子が教育を受けることには、次世代の教育レベルの向上、コミュニティの活性化など、いくつもの社会への良い効果があります。そこで、JENでは常に女子教育の優先度を高くし、意識しながら支援活動を行っています。

楽しそうに学ぶ女子生徒たち

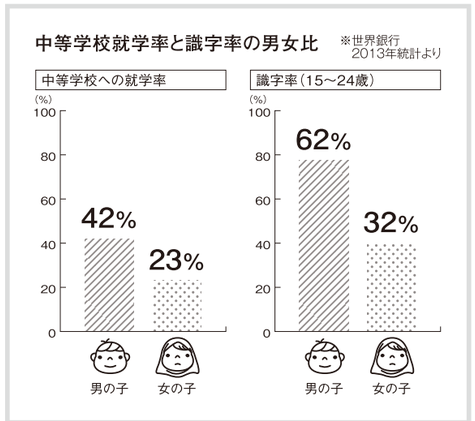
境界壁が建てられた学校

衛生教育で下痢が激減

アフガニスタンでは、紛争などにより国内の多くの生活基盤が破壊され、公衆衛生インフラが整っておらず、清潔な水や医療機関へのアクセスが困難な状況が続いています。時に死に至る下痢疾患の多さも、深刻な問題となっています。アフガニスタンの乳幼児死亡率は1000人中97人と世界ワースト16位と言われています。※

そこで、JENは学校の施設整備と並行し、人々の健康状態を改善していくため、学校を中心とした衛生教育支援も行っています。子どもたちを対象としているのは、衛生状態の改善が急務なだけでなく、子どもたちは自分たちの知識を、家族やコミュニティに広める力を持っていると考えているからです。

地域に知識が根付く事を目標とし、JENはまず、教員を対象に衛生教育研修を実施します。学ぶ意欲にあふれた教員からは「衛生教育を実施していくことの重要性を学びました」といった声が聞こえてきています。教員は得た知識を子どもたちへ伝え、子どもたちは毎日のように手洗い・歯磨き・爪切りなどを学び、それが習慣になっていくのです。現在進行中の5箇年プロジェクトでは、2011年からの4年間で、約10万人の子ども達に衛生教育を行い、今も進行中です。



2012年～2014年に行った調査結果によると、JENが衛生教育を実施していない地域では、下痢患者数の減少率が毎年約2%だったのに対し、実施した地域では、平均約25%でした。衛生教育を受けた子どもたちが、衛生を保つことの大切さを十分に理解しただけでなく、それを家族にきちんと伝えている、という嬉しい結果です。

平和な未来のために継続的な支援を

JENはアフガニスタンでの活動を開始してから、14年間、一度も支援を中断したことはありません。草の根レベルの小さな活動であっても、根気強く対象地域にとどまって活動を継続することによって、日本をはじめ、国際社会に対する人びとの印象は好意的なものとなります。また、息の長い支援により、人びとは、「自分たちは忘れられていない」「多くの人が自分たちを心配し、支えてくれている」ということを実感し、安心して自立に向かい、前に進むことができるのです。JENが行っている衛生環境改善支援は子どもたちの成長を支えるだけではなく、コミュニティや国の再建にも大きく貢献しています。

子どもたちをサポートする、という事は終る事のない長い、長い道のりです。現地の人びとが自分たちの力で子どもの未来を切り開く事が出来るようになるまで、JENはこれからも支援を続けていきます。

※世界銀行2013年統計より

アフガニスタン概要

- ○面積　652,225平方キロメートル（日本の約1.7倍）
- ○人口　2,982万人（世界銀行2012年統計より）
- ○首都　カブール
- ○主要産業　農業（小麦、大麦、米、トウモロコシ、ジャガイモ、サトウキビ、アーモンド等）

マンスリーサポーター募集

「好きな金額で少しずつ」をずっと。
支援してみたいと思った
その日から、1日50円～で
始められる募金システム。
お申込みは、
JENのWEBサイトから。

JEN 生きるちから　検索

http://www.jen-npo.org/monthly/

爪切りの習慣は、健康を守るために大事な第一歩

衛生の授業で、手の洗い方を習う女子生徒たち

教員を対象にした衛生教育研修の様子

研修終了証を受け取る女性教師

キャンプに暮らす人びとの希望となるもの

政府軍と武装勢力との終りの見えない戦闘は、今なお各地で繰り広げられ、増え続ける国内避難民の数は、現在約250万人※にも達しています。JENは2014年12月に国内避難民の約半数を受け入れているクルド人自治区で活動を始めました。まず、着のみきのままで避難してきた人びとへ越冬支援物資が購入できるクーポンを配布しました。現在は、自治区内に設置された30以上ある避難民キャンプの一つで水衛生環境の整備を担当しています。

クルド人自治区に避難し、工事中の建物などに暮らしていた約1万2千人の人びとが、このキャンプに12月末以降、移住してきました。ここでは、世帯毎にひと張のテントが割り当てられています。各テントにキッチンとトイレ・シャワーが完備な上、水も蛇口からでるので、汲みに行く必要もありません。子ども達が通う学校は今月開校予定です。

一見、着実に生活環境の整備が進んでいるようですが、人びとの避難先での不安な生活や、戦闘から逃れた時に経験した恐怖による心の傷は図り知れません。キャンプでは、一人で遊んでいる子どもや、小高い丘に腰を下ろし一人でたばこを吸っている若者を多く見かけます。沢山の人が暮らしているはずなのに、何故かキャンプの中はとても静かです。

一方、少しでも前向きに生きようとしている人の姿もあります。自発的に子どもたちに勉強を教えている若者たち、ゴミ拾いを始める子どもたち、故郷に戻った時に大学に行けるようにと空地で一生懸命に勉強している若者の姿などは、キャンプに暮らす人びとの希望となっています。

今、人びとが心から願っていることは、「平和になって故郷に帰り、いつもの生活を送ること」。このキャンプで暮らしている子どもや若者たちが一日も早く故郷に帰り、大人になった頃、このキャンプでの思い出話で笑顔になれるように、と願いながら活動を続けています。

※出典：国連人道問題調整事務所（UNOCHA）より。2015年3月時点

クルド人自治区の国内避難民キャンプには約12,000人の人びとが暮らす

キャンプの50%以上が18才以下の子どもたち

ゴミ拾いのボランティアを募ると、たくさんの子どもたちが参加してくれる

ザータリ難民キャンプ 3年目の新たな挑戦

2011年3月以来、ヨルダンは人口の10%にも及ぶ、約62万人※のシリア難民を受け入れています。JENが活動するザータリ難民キャンプには、現在約8万人※の人びとが暮らしています。ヨルダンは、世界で最も水が不足している国の一つで、難民の流入による人口の急増によって、水問題が一層深刻になっています。難民キャンプでも深刻な問題で、中長期的な視野にたった、持続可能な供給方法の確立が急務です。

現在、難民キャンプでは、大型トラックが毎日、何百基もの給水タンクに水を補充しています。国際基準を越える一人あたり35L／日の水を供給していますが、人びとは、この限られた量の水に満足していません。特に夏になると、給水タンクに水が補充されても、30分も経たないうちに空になってしまいます。現在の給水システムでは、住民へ公平に水が行き渡らない状況が生まれています。

また、住民は、仮設住宅の外に小さな穴を掘って排水するか、そのまま垂れ流しています。場所によっては水はけが悪く、雨季には洪水に見舞われる事もあり、その度に汚水や排水がキャンプ中に広がってしまい、感染症を引き起こす原因となっています。

これを解決する為、JENをはじめ支援団体はキャンプに上下水道インフラを整備する計画を練ってきました。立案から一年経った昨年末、各仮設住宅に直接水道を引く事と、下水道を建設する事が決まりました。

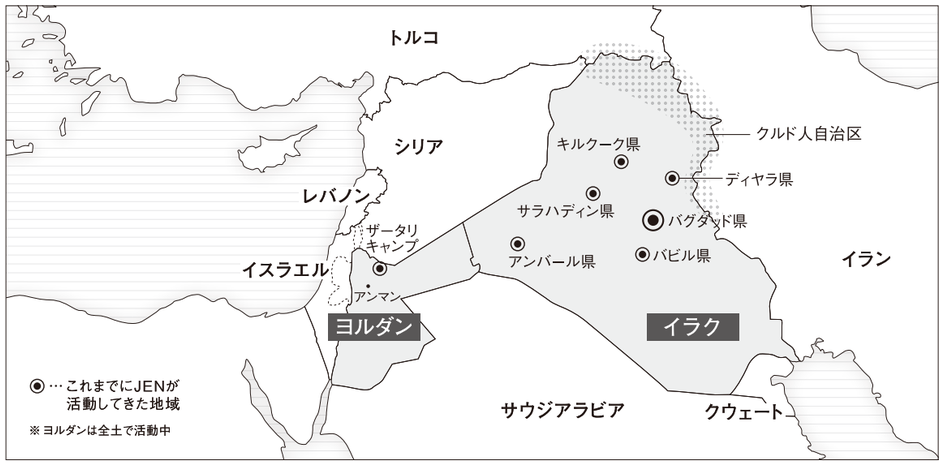
新設される上下水道は何千戸もの仮設住宅に適合させ、長期間に渡って使用することを前提としています。その為、全ての工事が完了するには、8～14か月かかる見込みです。また、完成後も水の供給量は一人あたり35L／日に限定するため、水道の使用時間を制限し、供給量をモニタリングする取り組みが必要になります。JENにとって、新たな挑戦が既に始まっています。

※出典：国連難民高等弁務官事務所（UNCHR）より。2015年3月時点

水が足りない一方で、ひび割れたタンクやホースから漏れた水が道に広がる

嵐により、溢れ出た汚水を取り除くJENの技術スタッフ

キャンプ内に設置された給水タンクからホースで容器に水を補充する人たち



7年間のご支援、ありがとうございました

南スーダン

2015年1月末に、南スーダンでの支援活動を終了しました。2005年まで、20年以上に渡る内戦から避難していた人びとは、草の茂みなどでの過酷な潜伏生活を強いられていました。2006年にはコレラによって500人以上の人びとが亡くなるなど、特に水衛生環境は劣悪でした。

JENは中央エクアトリア州の帰還民を対象に、2007年より水衛生環境改善の支援を行ってきました。井戸やトイレなどの建設といった物質的な支援のやり方を工夫することで、人びとの再定住を促し、コミュニティを再構築する事を目標としてきました。例えば、住民に井戸の修復や保守・点検の研修を受けてもらい、人びとが自ら水衛生問題を解決できるようにするやり方です。また、衛生教育活動では正しい知識が確実に広がるように、コミュニティや学校の生徒と一緒に、時に人形劇や歌を交えて楽しみながら活動を行いました。その効果は確実に広がり、昨年の南スーダンで大流行したコレラに、JENが活動を行った地域では一人も感染する人はいませんでした。それは、人びとのコミュニティが確実に育っている事を表す、嬉しい結果でした。

最後に、自立支援の大切さを理解し、支援活動に大きく貢献してくれた、現地スタッフに感謝の意を表したいと思います。彼らは、どんなに困難な時も熱意と努力で乗り越えてきてくれました。世界で最も若い国、南スーダン。JENの支援は終了しますが、南スーダンの仲間がこれからも情熱を持ち続けて自分たちの国づくりに貢献してくれると信じています。

娯楽の少ない南スーダンで人形劇は、子どもにも大人にも大人気

衛生教育をおこなった小学校の元気いっぱいな生徒たち

とっても頑張ってくれたJEN南スーダンのスタッフたち

皆様からの温かいご支援は、確実に届いています

パキスタン

昨年9月に発生した洪水により甚大な被害を受けたパンジャープ州ムザファ・ガー県では、災害から3ケ月経過した12月でも、流された家屋の瓦礫が山積みでした。出会った女性達が、これまでの苦しみを涙ながらに話してくれました。冬のテント生活は過酷なので、土の上に一台だけあるベッドに身を寄せ合って眠るか、近くに住む親戚の家へ泊まらせてもらうそうです。家が流され、長引くテント生活。家の再建には年収の何倍もの費用がかかりますが、農業を生業とする彼らの畑は、収穫を目前に洪水に流されてしまいました。元々の貧困と重なり当面の資金を工面するために家畜を売ってしまった人もいます。こんな状況でも、彼女たちは「神のご加護を」と、スタッフを迎えてくれる広く強い心をもっていました。JENは、洪水被災者を対象に掛布団や床に敷くブルーシートなどの物資、衛生用品や水差しなど生活に必要な物資を配布しました。今回の緊急支援も、被災者の方々を励まし精神的にも支えるものとなりました。

緊急支援として、1,198世帯に越冬・衛生用品を配布しました

有機肥料作りが未来への希望へ

スリランカ

スリランカ北部では、26年に渡った内戦の終結から6年が経過し、これまでに46万人以上※の国内避難民が、紛争前に暮らしていた故郷に帰還してきました。JENでは、帰還した人びとが話し合いを通して平和的に問題解決する能力を高めるための支援を行っています。その一つが、帰還民による農業協同組合の活動です。組合の設立から運営までを行うことで、人びとは行政や事業関係者との交渉術も学んでいます。2013年から開始したコンポストでの有機肥料作りでは質の高いものが作れるようになり、法人への肥料の販売契約を獲得すべくメンバーは奮闘しています。まだ契約には至っていないものの、いくつかの契約交渉で着実に経験値を増やし、自信につながってきています。また、組合間で互いの生産品や原材料を融通できる様な、より発展的なコミュニティ活動になること、そして近年のスリランカで発生している大規模な干ばつによる食糧不足解消にも貢献できればと期待しています。

※出典：国連人道問題調整事務所（UNOCHA）より。2012年12月時点

コンポストを使って有機肥料をつくっている女性たち

国の未来を担う子どもたちのためにも

ハイチ

2010年1月に大地震が起きて5年。震災後キャンプで生活していた約94%の人びとは、住居に戻ることができました。しかし、いまだに105の被災者用キャンプに約8万人もの人びとが暮らし、安全な衛生施設を利用できるのは、国民の約26%に留まります※。JENは地震発生直後の緊急支援を経て、現在はキオスク型給水施設や貯水槽の建設、水路の修復等にも支援の幅を広げています。同時に、住民が主体となって施設を管理する為の持続可能な仕組みの構築を目指しています。例えば、給水施設を地域のボランティアが管理し、これを長く大切に使ってもらう為に水の利用料を徴収する仕組みを作りました。低所得の住民にとって、水の利用料を支払うことは容易ではありませんが、ボランティアは、地道に普及活動を続けています。また水因性疾患予防の為に、衛生教育にも力をいれています。人びとの習慣は中々変わりませんが、国の未来を担う子どもに焦点を当て、知識を普及しています。

※出典：国連人道問題調整事務所（UNOCHA）より。2014年12月時点

クイズで楽しく水衛生を覚える子どもたち

EVENT REPORT

東北のためにいま伝えたい8分間のスピーチ「メモリースピーチコンテスト」が終了しました

「メモリースピーチコンテスト」全国大会が終了しました。会場でスピーチを聴いてくださった皆さまの投票により選ばれた「もっとも心に残った、いま伝えたいスピーチ」が、金賞・銀賞・銅賞を受賞しました。東日本大震災の風化防止を目的に、昨年8月にスタートした「メモリースピーチプロジェクト」は、11月に宮城・岩手・福島の3県（県大会）、12月に東京（全国大会）にて「メモリースピーチコンテスト」を開催しました。一般公募より選ばれた29名の出場者が、各大会で震災の体験や想いを発表しました。

県大会と全国大会に出場した29名（38本）の動画は、特設WEBサイトでご覧いただけます。2015年3月10日までにスピーチ再生数は3県総計10,827回を達成し、SNSでのアクションを加えると目標の3万アクションを超えました。

震災から4年。東北の皆さんがこれから歩む復興の「過程」にひとりひとりが興味を持つことが、風化防止に繋がります。ぜひスピーチをご覧ください。

- 金賞　琴田巴菜さん（福島県代表・福島県立磐城農業高校3年）「いわきへの想い～私たちの取組み～高校生ができること」
- 銀賞　高橋匡美さん（宮城県代表・塩釜市）「石巻市南浜町ー父と母を亡くしてー」
- 銅賞　柴田滋紀さん（宮城県代表・NPO法人にじいろクレヨン）「命のつかいみち」
- チームスピリット賞　福島県チーム　ポイント総計：5,182 ポイント（スピーチ再生回数／大会エントリー数／福島県大会観客数（USTREAM含む）／全国大会投票数をポイントとして換算）

2015年3月11日、福島県チームが「チームスピリット賞」に決定しました！3月10日までに、風化防止を目指してポイントを3県チームが競い、最もポイントが多かったチームが受賞しました。福島県チームの動画再生回数はチーム総合（9名）で4,860回を超えました。

メモリースピーチプロジェクトWEBサイト www.jen-npo.org/memory/

琴田巴菜さん（金賞）

高橋匡美さん（銀賞）

柴田滋紀さん（銅賞）

EVENT REPORT

安藤美姫さんと「スケートで遊ぼう！」を開催しました

2月15日（日）、スケーターの安藤美姫さんがプロデュースする東日本大震災支援プロジェクト「Rebornガーデン」（リボーン・ガーデン）では、石巻と東松島の子どもたちのためのイベント「スケートで遊ぼう！」を宮城県石巻市のスポーツセンター・プレナミヤギで開催しました。2012年に発足したRebornGardenプロジェクト。以来、JENとともに、石巻の子どもたちをサポートしてきてくださいました。「いつか石巻でスケート教室を開催して欲しい！」という子どもたちの願いが叶ってスケート教室が実現しました。

当日は、安藤美姫さん、曽根美樹さん、西田美和さんの3名のフィギュアスケーターの皆さんの指導で、スケートが初めての子から上級者まで、一所懸命にスケートレッスンに励みました。レッスンの後は、チームにわかれた発表会。練習した成果が実りました！

（上）57名の子どもたちが参加しました。（右）レベル別にわかれたグループを、安藤さん、曽根さん、西田さんが回り、ひとりひとりを丁寧に手ほどきしてくださいました。レッスン時間は1時間の予定が2時間にはじめは緊張気味だった子どもたちも元気な笑顔に。レッスンが終わるころには少し自信がつきました。